障害者の森林利用を考える
―障害者施設へのアンケート調査の結果から―

佐　藤　孝　弘

はじめに

ノーマライゼーション，バリアフリーなどの考え方の広まりを背景に，森林でも，心身に障害を持つ人たち(以下，障害者と呼びます)を迎え入れる試みが行われています。ところで，障害者や障害者をとりまく人たちは森林の利用をどう考えているのでしょうか？

こうした疑問を明らかにするため，私たちは障害者施設(以下，施設と呼びます)を対象に，森林の利用をテーマにしたアンケート調査を実施しました。ここでは，調査結果の概要について報告し，得られた結果を基に，障害者の森林利用に関する調査研究の方向性について考えてみたいと思います。

調査の方法と回答してくれた施設

今回は，障害者の実状に理解の深い施設職員の方々を対象に調査を行うことにしました。

その内容を表－１に示します。質問は，施設の概要や周辺森林の状況，森林で実施している活動に関する事柄などで構成しました。

表－１　アンケート調査で行った質問の内容

1　施設の概要

1) 利用者の障害の状況
2) 施設の種類

2　施設周辺の森林・みどりの状況

1) 施設周辺の森林への充足度
2) 施設周辺にある森林

3　森林を活用した療育活動や利用者の屋外活動

1) 森林で実施している活動の有無と実施内容
2) 森林での屋外活動の実施頻度

4　森林活動の促進について

1) 森林公園に求められる配慮
2) 森林活動 実施に生じる問題点
3) 森林活動の効用
4) 森林利用の支援に必要性 の高い事柄

5　自由記載

1) 森林利用に関する意見や希望

作成した調査票を2002年に道内の411の施設に郵送したところ，192通の回答を得ることができました(回収率 46.7%)。ふつうの場合，郵送でのアンケート調査の回収率は，概ね20～30%程度といわれています。今回はこれに比較すると回収率が高く,各施設の皆様の森林利用への関心の高さが推測されます。

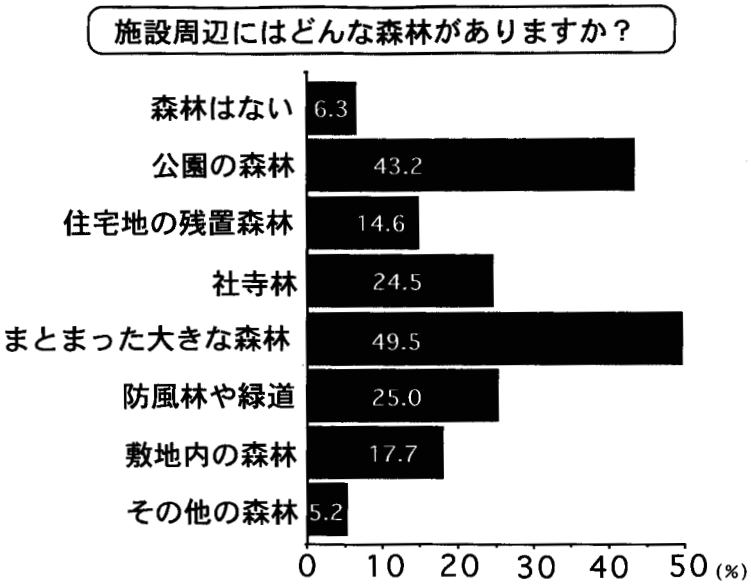
回答を集計したところ，施設の種類では，身体障害者施設が全体の14%，知的障害者施設が70%，障害児の施設が13%などでした。また，施設を利用している方々 (以下，利用者と呼びます)の障害種は知的障害が68%と最も多く，次いで，身体障害と知的障害などの複数の障害が32%，身体障害が17%などとなっていました。

今回，回答してくれた施設の多くは知的障害者施設でした。このため，利用者の障害種も知的障害が主と考えられます。しかし，複数の障害(知的障害と身体障害)を持つ利用者がいる施設が全体の1/3にのぼり，一人ひとりに色々な配慮が必要な様子が伺われます。

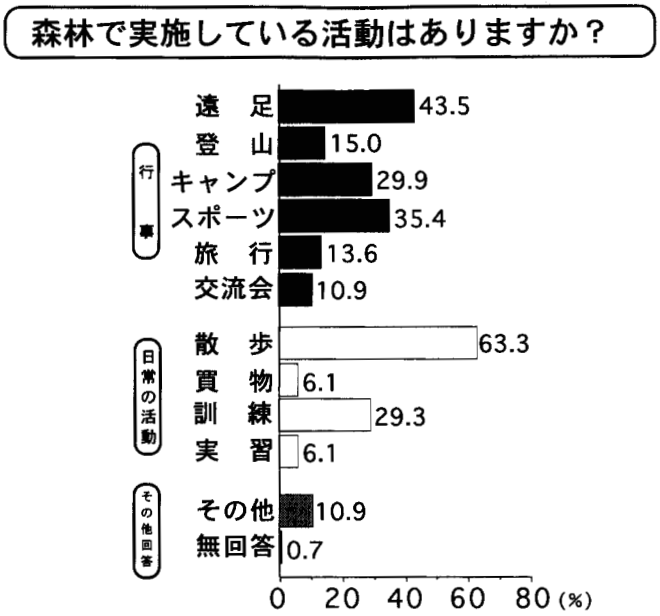
調査結果の概要

１) 施設周辺の森林と森林での活動

森林の利用に関連する事柄として，各施設周辺が森林に恵まれているか(以下，森林への充足度と呼びます)ということや森林での活動の有無が挙げられます。このようなことを踏まえ，森林への充足度，施



図－１　施設周辺の森林の種類（N＝192　%　複数回答）



図－２　森林で実施している活動（N＝147　%　複数回答）

設周辺の森林の種類，森林で実施している活動の内容，森林活動の効用について尋ねました。

森林への充足度では，約79%の施設が「非常に恵まれている」「どちらかといえば恵まれている」などの肯定的回答をしていました。施設周辺の森林の種類については,「森林はない」が6.3%にとどまる一方，最多は「まとまった大きな森林」，次いで「公園の森林」が多い結果でした。また，敷地内に森林があるとする回答も約18%みられました(図－１)。

森林での活動については全体の約80%が実施していると回答していました。その内容をみると,遠足,キャンプといった施設の年間行事，散歩，歩行訓練などのような日常の活動(療育活動)に分けることができます(図－２)。さらに，森林での活動が利用者にもたらす効用については,「効果はない」(０%)に対し,「開放的雰囲気の中で楽しく過ごす」(80.7%),「ストレスの発散と体力づくり」(64.0%),「静かな雰囲気の中で情緒を安定させる」(56.3%)でした(複数回答)。

２) 森林公園への要望と森林利用への支援

森林の利用を進めるときの課題について知るため，森林公園に求められる配慮，森林利用の支援に必要性の高い事柄を尋ねました。

森林公園への配慮では「問題はない」(12%)に対し，88%の施設が配慮事項を指摘していました。共通性の高い事柄は,「トイレの数の不足」,「散策路の段差」,「散策路の路面状態」,「公園に関する情報提供不足」,「散策路の傾斜」でした。

こうした，障害者の森林利用を進めるために必要な支援を尋ねました。結果としては,「施設のバリアフリー化を進めること」が全体の約3/4の施設から指摘されていました。さらにこれに次いで,「森林体験のためのプログラムを作ること」(56.8%),「森林での活動を支援するボランティアの設置」(45.3%)を求める回答が多くみられました。

表－２　施設種別にみた森林への充足度

	森林への充足度（%）	
	恵まれている	恵まれていない
身障者施設	80.8	19.2
知的障害者施設	81.2	18.8
障害児の施設	72.0	28.0

身障者施設N＝26，知的障害者施設N＝133，障害児の施設N＝25
恵まれている　：「非常に恵まれている」「どちらかといえば恵まれている」
恵まれていない：「どちらかといえば恵まれていない」「全く恵まれていない」

表－３　身体障害の有無と森林での活動

	森林での活動の有無(%)	
	実　施	未実施
あ　り	85.3	14.7
な　し	92.3	7.7

身体機能に障害を持つ利用者がいる施設　：N＝102
身体機能に障害を持つ利用者がいない施設：N＝65

３) 施設種・障害種と回答の関係

ここまでの結果を施設種(身障者施設・知的障害者施設・障害児の施設),障害種(身体障害を持つ利用者がいる施設といない施設)に分類して比較しました。

森林への充足度については施設種による違いはなく，全体の集計結果と同様に肯定的回答がどの施設でも70%をこえていました。ただし，障害児の施設は他の施設に比べ,「恵まれていない」とする回答が30%に近く，やや高くなっています(表－２)。

次に，障害種を基に森林での活動実施の有無を比較しました。身体障害を持つ利用者がいない施設の実施率(92.3%)の方がいる施設の実施率(85.3%)をやや上回っていますが, 両施

設とも80%以上の施設が森林での活動を実施している状況にあります(表－３)。

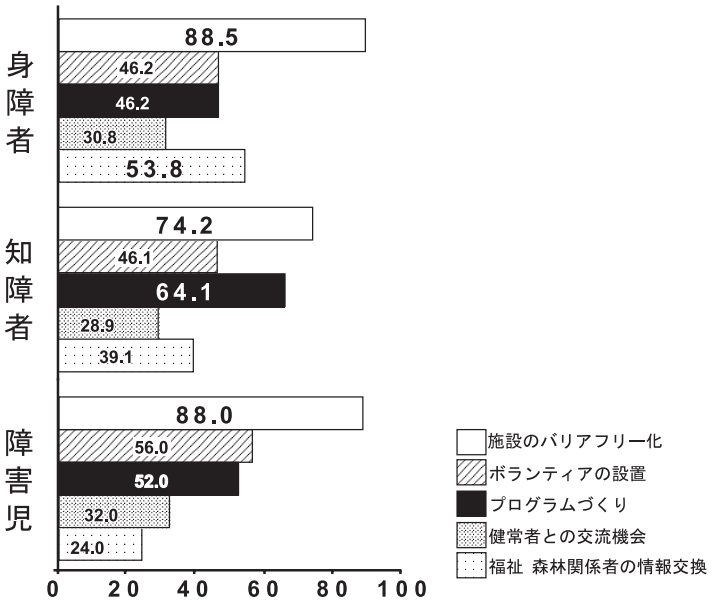
また，障害種別の森林公園への配慮に関する回答では，身体障害を持つ利用者がいる施設からの回答は，全体の集計結果と同様に,「トイレの数」,「散策路の路面状態」,「散策路の段差」,「散策路の傾斜」が上位を占めていました(表－４)。これに対し，身障者のいない施設では「森林公園全体に対する情報」が最多で，これに「トイレの数」,「散策路などの段差」が次いでいました。

最後に，森林利用を進めるために必要な支援に関する要望事項を施設の種類別に集計しました(図－３)。要望事項として共通性が高かったのは,「施設のバリアフリー化を進めること」でした。特に，身障者施設，障害児の施設では約90%がこれを回答としています。一方，知的障害者施設では，この値が約74%で，他の施設種と比較すると低くなっていました。また，身障者施設からの「福祉・森林関係者の情報交換」，知的障害者施設からの「森林体験のためのプログラムを作ること」障害児の施設からの「森林での活動を支援するボランティアの設置」のように，他の支援要望事項にも回答率の高いものがありました。

表－４　身体障害の有無と森林公園への配慮要望事項（回答率上位）

身体に障害を持つ利用者がいる施設 (N=96　%)		身体に障害を持つ利用者がいない施設 (N=62　%)	
トイレの数	69.8	公園の情報	53.2
路　面	61.5	トイレの数	48.4
段　差	61.5	段　差	40.3
傾　斜	44.8	路　面	37.1
公園の情報	40.6	道順を示す看板	24.2
トイレ破損	20.8	傾　斜	24.2
緊急時連絡	15.6	緊急時連絡	22.6

▒ 両施設に共通している項目



図－３　施設の種別と森林利用への種類（N＝179　%）

まとめと課題

この調査から以下の点が確認されました。

・障害者施設の多くは森林に恵まれていると認識し，行事と日常で森林を利用している。
・周辺森林の充足度への認識，森林での活動実施の有無については，施設種・障害種で差はみられない。
・森林での活動は利用者の心や体に一定の効用があると考えている施設が多い。
・施設から離れて森林を利用する場合に求められる配慮事項としては，利用者の日常生活動作(注１)を支援する設備充実への要望が最も多い。
・上記に加え，当該森林の障害者の利用に関する情報提供への要望が高く，これは特に知的障害者施設に顕著である。
・障害者の森林利用の支援に対しては，施設利用の障壁撤廃が重視されている。
・上記に加え，ソフト，人材，情報交換や交流促進も重視されているが，その度合いは施設種により異なる。

森林公園のように，障害者を迎え入れる役割を担う場では，先に示した日常生活動作(注１)を支援する設備づくりが基本になります。また，これと併せて，ソフトや情報などのサービス提供のあり方についても考える必要があります。一方，日常的な森林利用の場合には，そうした森林の中での時間を楽しく過ごしてもらうことが重要です。

このような問題の解決には，障害者の森林での行動を障害種や現地状況との関係から分析し，利用支援や介助に必要な条件を明らかにする調査研究が必要です。また，ソフトや情報に関しては，障害者側からの要望や情報の収集を基に内容づくりを進めていく必要があります。

障害者の森林利用に関しては，未だ調査事例が少ない状況です。今後も，障害者施設や障害を持つ人たちと連携しながら，こうした問題の検討を進めていきたいと考えています。

最後に，このアンケート調査に貴重な回答を寄せてくださった障害者施設の皆様，並びにアンケート調査の準備に協力してくださった北海道保健福祉部障害者福祉課の皆様に深謝します。

(保健機能科)

注１

日常生活動作(ＡＤＬ(Activities of Daily Living))は，生活で最も基本的にくり返される動作群で，具体的には，食事，排泄，更衣，身だしなみ (整容) ，入浴，起居移動（寝返り，起き上がり，座位，立ち上がり，立位，歩行）をさします。